

---

# 世界に嫌われた女の子

chemical

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界に嫌われた女の子

### 【Zコード】

Z5255Z

### 【作者名】

chemical

### 【あらすじ】

ハルがふつとばされた世界で出会ったのは、神と皇帝。女嫌いの皇帝と人を信じきれない少女のはた迷惑な恋物語。（リハビリのために、サイトにあるお話を少しずつ改訂していくことにしました。タイトルは同じですが、少しずつ内容は変わっていくと思われます。全部改訂しなおしたら、サイトに戻します。土日以外1日1回更新したいです。）

## 1 (前書き)

不意に流血や痛いお話がありますので「注意ください」。  
この改訂が終わったら、サイトを通常運転に戻したいです・・・

晴は不思議な子であつた。

晴自身は当り前の事だと感じていたのだが。

周りの人には分からぬものが、彼女には見え、聞こえ、触れられた。

けれど、晴はいつからか

自身に見えたこと、体験したことをあまり口に出してはいけないのだ

だということも学んでいた。

それは、彼女の母親がいたからだ。

母親は精神的に弱っていた。

晴の言動一つ一つにひどく過敏に反応し、良いとは言えない反応を示す。

晴は子供の動物的な本能で感じ取っていた。

物心ついた時には彼女の母はすでにそういう精神状態であつたし

時折、気まぐれのように示される愛情も

言葉の暴力を投げかけるときでさえも晴にとっては母という存在以外の何者でもなかつた。

母のその状態は彼女が生まれる少し前に他界した父親の事故のせいでもあつたかもしれないが、

彼女もまた敏い人であつたから晴の異常さに怯えていたのかもしれない。

母親は晴の不思議な言動を子供の言つことだから、と受け流すことをせず

罵りに変えて吐き出していつた。

まだ、言葉の暴力だけだけ、ましだと思うかもしれない。

晴自身は、幼すぎてそのころの生活を思い出すことも難しいが

母と子、2人の生活の中で、大きな影響をもつ存在からの否定は

彼女を内向的にするには十分だった。

内向的になつた彼女を、支えてくれたのは母ではなく、人でもなかつた。

そうして、その交流を母に知られることでまた母の精神も削られていつた。

悪循環というのだろうか。

繰り返される言葉の暴力と堂々巡りに晴は黙つて耐えることしかできず、

彼女は母親の前であまり喋らず、行動しない子になつていつた。

だが、晴には逃げ場所ができた。

それは、彼女にとつてとても幸運なことであつたといえるだひつ。

子供というものには考え方、感じ方の見本が必要であり、一番の身近な手本が保護者だ。

それをなくしては精神の成育はうまく成り立たない。

晴にもそれは例外ではなく、事実その状態のままであれば彼女の今の状態はなかつただろうと容易に想像がつくというものだ。彼女が世間一般的に見ていい子に育つたのは彼女の母方の祖父母のおかげに他ならない。

彼らは、年に一度は顔を見せに来ていた孫と娘が訪ねてこないことに疑問を抱き

母親と晴を訪ねた時、彼らはその異常に敏く気が付いた。それだけではなく、彼らは彼女の母親が精神的に弱つてている状態にあるということや

母の晴への接し方を知つたときに素早い対応をしたのだ。もしかしたら、祖父母も薄々自分たちの娘の精神状態を疑つていたのかもしねない。

彼らは世間や周りの目を気にすることなく

母親を病院に無理矢理入院させ、晴を自分たちが住んでいる田舎へと引き取つたのだった。

祖父母に連れられて田舎へと行った晴は

その小さな目に、收まりきらない世界を見た。

怯えた小動物のようなビクつきは消え、青白かった頬には赤みがさし子供らしい柔軟性と順応性で欠けていた様々なものを取り戻したよ

うに見えた。

彼女の顔には表情が戻り、毎日近くの野山を駆け回ることを楽しみにする普通の子供になつていった。

彼女自身の周りには相変わらず、不思議な出来事が多かつたが田舎特有の空氣と、風土に紛れ込む程度のことだつた。けれども、晴は不思議なことは祖父母の前でしか語らなくなつていつた。

幼かつたとはいへ、母親の怯えや嫌悪の表情からそういうた事柄を忌むべきことと認識していたからだろう。

他の人間には友人であつたとしても曖昧に誤魔化していたが一緒に生活を営んでいる祖父母にはさすがに通用しなかつた。初めのころは、祖父母に対しても怯えながら話していたが母親の代わりに彼女を愛しんでくれていた祖父母は、晴の話を聞いても母のよつな反応は一切見せず。

笑つて頷いてくれたり、ときには真剣な顔で注意を促したりした。祖父母は晴がほかの子と違うことに恐怖は覚えていないよつだつた。いや、本当は彼らも晴に恐怖を覚えていたかもしれませんず、

ただ、その感情を決して晴には悟らせないよつにしていたのかもしれない。

祖父母は、普通の子と同じよつにやつてはいけないこと、危ないと思われるよつなことは

晴に厳しく言い含めたし、他の子らと同じよつに叱りつけた。晴が不思議なことを体験した時は

幼い子供は神様の子だからね。と、優しく頭をなでてくれていた。それは一度壊されかけた晴の世界を壊さないものであり、とても居心地が良かつた。

そんな日々が続いていたのに。

晴の7歳の誕生日にひとつ悲劇が彼女を襲つた。

その場所に決していはざがない彼女の母親が、彼女の前に現われたのだ。

精神的に弱っている彼女の母親は祖父母の手配した病院に入院しているはずで、

その病院はここからとても離れているといふのに、

母親はそこにいた。

入院患者の着ているような服ではなく、以前見ていた普段の服装のままで

庭先に立つ彼女は、晴を見つけてゆっくりと微笑んだ。

そのとき祖父母は、晴の誕生日の御馳走のために1時間かけて隣の市の大きいスーパーに行くと車で出掛けた。

祖父母の帰りを楽しみに待つつ庭で遊んでいた晴の目の前に立つた母親。

その世間的にとても美しい部類に入るその顔は、別れた時となんら変わつていなかつた。

晴のものとは違ひ黒曜石のような髪と瞳をもつ彼女が、

静かにたたえた微笑みは、見る者に優しさを感じさせるには十分だつた。

「晴」

呼びかけられたその声に、晴は思わず母親に飛びついていた。

足がもつれるような勢いであつたが、母はしつかりと晴を抱きしめてくれた。

いくら傷つけられたとしても、いくら罵倒されようとも

彼女は晴の母親であり晴の大好きな人なのだ。

物心ついてから晴が知る母は、時折気まぐれに愛情のようなものを示す人だつたが

そんな偏つた情を与えてくれる彼女でも、母親という晴の狭い世界

の中心だった。

そんな彼女が、笑顔で腕を広げ  
晴を包み込むように抱きしめてくれたことは

その時の晴には誕生日よりもうれしいことであった。

母親には1年ほどあつてはいなかつたが、

こんな微笑みで晴を呼ぶ彼女はもう、弱つていた精神が回復し  
退院してきたのかと思わせるほどで。

「おかあさん！おかあさん！・・・」

泣きながらしがみついてくる我が子をやさしく抱きしめながら、  
縁側から彼女は娘を家の中へと誘導する。

その顔には変わらず、微笑みを浮かべたままで。

「晴、ずいぶん大きくなつたのね・・・」

頭をなでながら優しく、泣きじゃくる娘に語りかける。

一瞬、声の中に暗いものが奔つたことに

泣いていた晴は気がつかなかつた。

けれど、それきり何も言わない母親に  
晴は顔をあげ、母親を見上げた。

涙でかすんでいたが彼女の母親はさつきと同じ微笑みのまま。

そこで、晴は妙な違和感に取りつかれた。

こんな顔を母親は一度でも見せたことがあつただろうか。

時折見せてくれた愛情の中、こんなに手放しの微笑みはあつただろうか。

母親はいつも、少し怯えが見える顔で

それでも精一杯微笑んで晴を見つめてはいなかつたか。

張り付いたように動かない母親の顔を、晴は思わずじつと見つめて  
しまつっていた。

変わらない。優しい笑顔。晴が見たことがないくらいの。

変わらない表情に、どこからだろうか

晴の中に恐怖がぽつりと広がつた。

晴は染みのよう広がる本能のままに、母親から後退る。

置で、晴の膝が少し痛いくらいに擦れてしまつたがそれを気にする余裕はなかつた。

母親は変わらない微笑みで彼女を見る。  
「どうしたの・・・？」

微笑みは変わらない。

変わらない。  
変わらない。

「やだつ！」

晴は怖くなつて逃げ出そうとした。何が、とかなんどとか、理由は分からなかつたけれどとにかく逃げることしか考えられなかつた。

恐怖に背を押されるように部屋を飛び出そうとして後ろを向いた彼女の首に細い、  
ひものようなものがしゅるりと巻かれる。

それが何かを確認する間もないまま、ものすごい力で絞められた。

「な・・・」

疑問を声に出そうとしても首が絞められているために声にならない。

だが、苦しそうな晴をみながら母親は静かに言った。  
彼女の首を絞める動作には何の躊躇もないまま力を込めて。

「大きくなるからよ。晴が、私のちいさな子のままでいいから。  
」うやつて、もう一度晴は小さくなるの、小さくなつて

あのころに戻つてもう一度3人でやり直しましょうね

精神が病んでいるからか、晴にも理解できない。

言葉の意味を考える間もなく、晴の意識は闇に落ちた。

晴の中を駆け巡つたのは、母親に対する疑問や怒りではなく生きることへの欲求

ただ、死にたくなかつた。

次に目が覚めたとき、彼女は無機質な白が囲む部屋にいた。そこには祖父母が泣きながら彼女が目覚めるのを待つていて晴の名前をずっと呼びながら、よかつた、ごめんね、しなくてよかつた。

そう何度も何度もかけられる声と彼らの涙に彼女の記憶にあることが現実に起こったことなのだと実感させられ、それが悲しくて晴は思い切り泣いた。

悲しいのは、母親にそこまで嫌われていた事実だつた。なんとなく、自分が生きているからには母親は死んだのだろう。と妙な確信が彼女のなかにはあつた。

受け入れたくない記憶を、無理やり認めさせめるかのような祖父母の泣き声に

晴は、その記憶から逃避することもできず

ただ、本当にあつたこととして刻みつけられたのだった。

大分大きくなつてからだつたが、祖父母に教えてもらつたことによ

ると、

母親は欄間にロープをかけて首をつっていたらしい。  
そばには彼女の字で“晴をあたしから守つて”という走り書きのメモも見つかった。

晴は自分で首を絞められてずっと氣絶していた

と思っていたのだが、祖父母の話によると醜く変わった母親のそばでぼんやりと母親を見上げていたらしい。

祖父母が声をかけると、けいれんを起こして倒れ、そのままあの病院に担ぎ込まれたということだった。

医師が晴を診察して初めて、首にひもが巻かれ尋常でない圧力で絞められた事実が明らかになつたという。

いくつかの組織はひどく傷ついていたが運良く重要な器官や声帯に損傷は見られず

絞痕に比べると医師も首をかしげるほどの軽傷だったらしい。

その後も、なんだかんだと問題はあつたものの、晴は順調に成長していった。

ただ、なぜか人よりもとても成長が遅かった。

小学校6年生でも3年生ほどに見えたし、中学生になつても小学生と間違えられる容姿のままだった。

だが、そのことで彼女がいじめられたりすることはなかつた。

からかわれることはよくあつたが、彼女は事実を否定はしなかつたし逆に言い返すこともしていた。

ひとえに彼女が、小柄ながら運動神経が抜群によく

小学生のころから誰一人彼女に喧嘩で勝てる者がいなかつたということも

いじめられなかつた理由の一つだろう。

広くて狭い田舎では、晴の祖父母が有名なサークル出身といつこと

が知れ渡つていたため、

彼女の運動神経を誰も不思議には思わなかつた。

上級生も、彼女には一目置いていたし、  
何より頭の回転が速く運動が抜群という彼女自身が  
人に嫌われるような性格ではなかつたという所が大きいだろづ。  
もしかしたら、知らず知らずのうちに頻繁に彼女の周りで起つる出  
来事によつて、

周りの人間たちの同情を得ていたのかもしれない。  
少なくとも晴はそう思つていた。

それなりに、晴は幸せな生活を送つていたが、14歳の時に彼女の  
祖父が突然他界した。

高齢であつたのもそうだが、不幸な事故だつた。

おじどり夫婦と評判高かつた祖母も、祖父の他界から体調を崩し、  
晴が15歳の時に亡くなつた。最後まで晴を気にかけてくれていた。  
早過ぎる、一人の死はとても悲しかつたが  
周りの助けと、祖父母の遺してくれた

これから生活していくには困らないだけの遺産、

生命保険によるお金、更にはよく知る弁護士のおじさんが後見人に  
なつてくれるという、

祖父母の温かい庇護は祖父母がいなくなつても晴を守つてくれてい  
た。

そうして16歳になつた晴は祖父母の家で一人暮らししながら高校生  
活を送つてゐる。

「いってきます」「

写真の中の祖父母にいつものように挨拶をして、彼女は学校に行くために家を出る。

なぜだろうか、彼女の親しい人たちとはたとえ生身の姿ではなくつたとしても

彼女の前に姿を現すことがなかつた。

常ならざるモノたちを見、交流することができる晴の不思議も依然として幼いころのまま残つているというのに。

もしかしたら、姿を現すことで晴があちら側に飛び込むとでも考えているのかも知れない。

それもいいかもしれない、本当に時々考えてしまう。

庭の隅でさわさわとうごめくモノたちに恐怖を感じることもなく、逆に親近感さえわいてしまうのだから。

そんなことを考えながら、晴は門の脇に寄せていた自転車に鞄を放りこみ

田舎の一本道を自転車で駅まで向かつた。

その駅から4つはなれた駅の近くに晴の通う高校があるので。

途中、朝からだだつ広い畑で農作業中の近所のおばさんたちと会い、いつものように挨拶をすると

一人のおばさんが手に持つていた籠の中から黒いごぶし大の物を投げてきた。

晴がそれを軽く片手で受け止ると、おばちゃんは笑つた。

「晴ちゃん！ いまから学校かい？ おばちゃんの特製焼肉おにぎりだよ！ もつていきな！」

「危ない人には気をつけるんだよ！」

「知らない人についていつちやいけないよ……」

「ほら、ジュースも持つて行きなさい」

「ほら、ジュースも持つて行きなさい」  
晴に次々とおばちゃんたちから物が投げられる。さすがにするめい  
かは朝からちよつと重いけれど。

みんな、晴が幼いころからのご近所さん達で

晴の祖父母が亡くなつたときから、まるで親のように晴を怒り、心  
配してくれている人たちだつた。

彼らは、晴に会うといつも食べ物をくれる。

金錢的には困つてはいないので、そういうた食べ物は晴にとつて  
とても助かるものだつた。

晴は、料理があまり得意ではないからだ。

何しろじ田舎なのでコンビニも少ないし、  
スーパーの惣菜も夕方の割引を狙つているご老人たちやおば様たち  
にかかれば

晴が学校から帰つてきたこには微妙なモノしか残つていない。

「ほら、あんまりぼさつとしてると電車に遅れちやうよ……」

くれぐれも、暗い路地には入らないようにね

いつものようにお菓子やらジュースやらをもらつて、  
高校生な自分にはちよつと過保護すぎる言葉をもらつてと、いつも  
通りの朝だつた。

「ありがとうございます！」

そう言つて、もらつたもの達を鞄に急いで詰め込んだ。

腕の時計を見ると、少し急がなければならぬ時間になつてゐる。

おばさんたちに笑顔で手を振ると、自転車に飛び乗り

そのまま黙々と自転車をこぐ。

朝の少し冷えた風が心地よく、通り抜けて行つた。

数分自転車をこぎ続けていると、田畠が少なくなり段々と車通りが  
多くなる。

駅前の繁華街が近づいてきたのだ。

繁華街といつても住民が買い物をする商店街と

全国チーンのファストフード店が一軒あるだけのもの。

けれども国道はそれなりに交通量が多く、ちらほらと小学生が近所の小学校に登校している姿も見える。

国道沿いに駅へと向かっていた晴は、視界の端に黄色い帽子がぴょこんと動くのを見た。

無意識に眼で追つてしまつた晴が次の瞬間に見たものは目の前の国道に黄色い帽子を被つた男の子が飛び出すところだつた。

「あぶない！」

叫んだが、自転車に乗つたままの晴の声は少年まで届かなかつた。物を落つことしたらしく、少年は下しか見ていない。

けれど、少年が飛び出した道にはトラックが迫つていた。

大きな音を鳴らすトラックに、少年は逃げるのではなくびくりと体を硬直させた。

とつたに晴は自転車から飛び降りて、走つた。

「つ・・・・！」

間に合うかギリギリのところだ。

持前の運動神経で体勢を崩すことなく自転車から道路に着地し、男の子を抱き上げると同時に男の子を歩道側へと放りなげる。いつも通つてゐる道だから、勘でしかないが

確かに少年を投げた方向には「ミの山があつたはずだった。

なくても、トラックにぶつかるよりはましだろう。

だつて、少年を抱えたまま反対車線に出ても別の車にひかれてしまう。

そこまでは頭と手が回つたのだが、

少年を投げた後自分がどうなるかなんて考えてなかつた。

ブレー キ音、悲鳴、衝撃

奇妙な浮遊感。

晴が覚えているのはそこまでだつた。

死にたくないな。  
そう、ずっと昔と回り廻りを思った。

思えば結構悲惨な人生だったのかと思う。

自分としてはとても幸せだったのだけれど、客観的に見て自分は悲しい人生を歩んできたのではないだろうか、不思議なものが見え、母親に殺されかけ、

祖父母は早く亡くなり、その他、周りの人たちから心配されるほど、いろんな事件に巻き込まれてきた。

そうして、自分は子供を助けてトラックにふつじばされる。

・・・どう考へても典型的とまではいかないが、悲惨な人生だ。

「あー、まあ本人が満足してるだけでいいかなあ」

お、声が出た。自分はてっきり死んだと思っていたのに。

「あ、死後の世界だから自分のどうとでもなるのかな?」

首をかしげる。実際生きているのならトラックにあたつたからには少なくとも骨折や、怪我をしているはずで、その痛みがあるはずだ。けれども今、自分の体には全く痛みも傷もない。

と、ここまで考へて気がついた。

「ハーハーハー・・・・?」

ほのかに白く明るい夢の中のよつたな場所。

ここが死んだ人が来る場所なんだろうか?

てつくり、すぐに幽霊にでもなるかと思つていたのだが、意外に、未練とかがなかつたのだろうか。

「違うわよ。 ハル」

聞こえてきた声が、空間を切り裂いたように晴の耳に届いた。

「ここで会つのは久しぶりね。まあ、もう元の世界には戻れないけ

「ど

傷の具合はどう?

とにかくほほ笑みながら、声と同じくらいきなりその人は現れた。  
真っ黒な瞳と豊かにうねる髪を背中に流し、  
白い布で挑戦的な体の覆い方をしている。ないすばでーのお姉さん  
だ。

ちなみに背中には真っ白な翼があつた。  
天使のような恰好のその人を見あげて  
晴は、言葉を失つた。

いきなりファンタジーな恰好をした天使っぽい人が現れたからでは  
ない、  
その人が、日本でこんな恰好をしていたら捕まりそうだなと思つた  
からでもない  
いきなり現れたその人の顔に、だ。

黒曜石のようにまつ黒な瞳と髪の毛

大きな目と少し厚めの唇。とても整つたその顔は

母親のものだつた。

「あ・・・お・・・かあさ・・・?」

目の前の者は母親に瓜二つであった。  
混乱する。

自分の頭がおかしくなつたんじゃなかろうか。

ふいに、過去の網膜に焼きつけられた映像が、頭の中を掠める。  
だってお母さんは・・・ゆれていなかつただろうか・・?

忌まわしい記憶の中の映像に心臓と体の言うことが聞かなくなる。  
耳元で、うるさいくらい心臓の音が聞こえた。

かは、と肺から小さく空気が漏れる。

息ができない。

息を吸おうとしているはずの肺が、筋肉が働きを止めたかのようだ。まるで昔の無声映画のようだ、目の前で切り替わる映像のことしか考えられない。

「ストップ。落ち着きなさい！ ハル」

突然の女の人の声に、どうしてか晴の思考がはつきりとクリアになつた。

無声映画のような映像は瞬く間に視界から消え、緊張していた体が自由になる。

胸を押さえていた手も、制服も汗で湿っていた。

片手を床につけ、必死で酸素を肺に入れるため息を吸い込む。息を整えながら、ここまで動搖してしまったものなのか、と頭の冷静な部分で考えた。

まだ、囚われている。

母親に。

息を整える晴の前に、母親と瓜二つの女性は膝をつく。気配に、晴が顔をあげると

女性は晴の肩にそつと、まるで愛しむように手を触れた。

「正確にいえば、あたしはあなたの母親ではないわ。

母親のような存在ではあるし、そつくりなのも認めるけれど。

落ち着きなさい。あなたは死んでないわ」

もう一度、言い聞かすよつにゆつくつと言われた言葉は案外すとんと晴の心の中に落ちてきた。

「あなたは・・・だれですか？」「は・・・・？」

絞り出すよつに言つた言葉は、震えているけれどきちんと声にすることができた。

何のひねりも芸もない言葉だが、一番知りたいのだからしょうがない。

晴の中に冷静さはいくらか戻つてきただよつだつた。

女のは笑つて晴と同じようにその場に座り込み晴の目をのぞきこんできた。

とても怖かつたが

さつきの自分に負けたくなかったから、晴は無理やり目を合わせ続ける。

そこにはあつたのは意志のはつきりとした黒い瞳。強い生命力にあふれた瞳だつた。

そう、あの人はこんな目をしなかつた。  
あの人の目はいつも違うところを見ていて、覗くとどこか暗い処に引き込まれそうになる。

そんな瞳をしていた。

この人と、彼女は違うモノだと

感覚で理解すると、晴の中に落ち着きと冷静さが一気にすべて戻つてきた。

女の人の目がやさしくなる。

そこには彼女には無かつた、晴への純粹な愛情があつた。  
祖父母の笑顔を思い出すような、そんな視線だつた。  
見ず知らずの彼女から、そんな感情を向けられることに少し混乱しつつ

晴は彼女が口を開くのを待つた。

「ハル。ここはね、あなたがいた世界と違う神々が治める世界。あたしはその中の一人。リルヴァーナ。あなたは元の世界では事故にあって、いなくなつたことになつてゐる」

言われてゐることとは無茶苦茶なのに、どうしてか真実だとわかつてしまつ。

真実だと理解してしまつことがおかしいのかもしれないが、晴は、この人の言葉に嘘はないと信じてしまつてゐる。

この人には、そうせざるを得ない圧力がある。

世界が違うとか、普通に考えてもおかしいことだ。

いくら、普通の人には見えないモノたちを見てきたとはいえ

晴は疑り深いほうだ。

神はまだいい。日本にはそれこそ多くの神々がいて私もその存在を幼いころから疑つてはいない。

神と呼んでもいいのかわからないものたちも多くいるが神と呼ばれる存在はどことなくキラキラとしているのだ。この女人、リルヴァーナもそう。

時折目を細めてしまうほど、眩しい。

昔からの不思議現象のせいでこういう事態に慣れてしまつたのか。どちらにしても一応は納得するしかないだろう。

今の晴が疑いを持つても、あまり意味がない。

万が一夢の中だとしても、だれにも迷惑をかけていないのでセーフだ。

「私は、元の世界に戻りたいです」

戻れないとさつき聞いたような気がするが、聞いてみなくちゃ分からぬだらう。

ここが夢である「うどん」だらうと、私が生まれた所はあそこなのだ

から。

私の言葉に、リルヴァーナは少し厳しい顔をしていった。

「あちらの世界の神々はあなたを手放すことに決めたわ。もう、戻  
れないの」

「ごめんね、と

いつの間にか握っていた手を強くつかまれて泣きそうな顔で言わ  
れては、

根っこが馬鹿なくらいお人好しだといわれる晴に勝ち目はなかつた。  
リルヴァーナが言った、晴を手放すとはどういうことなのだろうか。

「つまり、あっちの神様・・？ 仏様とかキリストとかに私が嫌わ  
れたということですか？」

推測を言葉に出してみて、首をひねる。

神様に嫌われるって・・・なんか悪いことをしただらうか？

そんなに悪いことをした覚えはないはずなんだけど・・・

と、難しい表情で考える晴にリルヴァーナは焦つていつた。

「嫌われたんじゃないの！ むしろ好かれたからこっちにいるのよ！  
あのね・・・あっちの世界とあなたの相性はものすごく悪かったの。  
神々は何とか助けようとあなたを一度こっちに飛ばして相性の修正  
を図つたんだけど・・・

結果は・・・運の悪さからもわかるとおり、ね。

だから、お気に入りのあなたを死なせたくないから、  
相性のいいこっちの世界に泣く泣く手放すことに決めたのよ

必死な言葉から嘘はないと感じられて、それはそれで悲しくなった。

神様に言われるくらい

やつぱり、私ものすゞぐ運が悪かつたんだ…。

そんな気はしていたが改めて言われるととても悲しくなつてくる。  
確かに、神様に嫌われているような気はしなかつた。  
助けようしてくれるまで好かれていたのも知らなかつたのだが。  
けれども、神様に助けてもらつていたというのにあんな運の悪さだ  
つたのならば

確かに世界と相性が悪いというしかないだろう。  
生きているだけましといつものだ。

トラックに吹つ飛ばされて、いきなり変なところにきて  
神様に会つて、世界と相性が悪かつた…つてどれだけ現実離れ  
しているんだろうか。

今の状況が夢でも一向に構わないし、むしろそのほうが嬉しいのだが  
こつそりとつねつた頬は痛いし、脳味噌以外の感覚が現実だと示し  
ている。

戻れないと言つていた。

元の世界に戻れないとなると、もう、友人にも近所の人たちにも会  
えなくなるということだ。

脳が考えるのを拒否しているのか

ふわふわとした現実感のない、悲しさがどんどん膨らんできて、勝  
手に涙まで出てきた。

「つ・・・」

目の前がゆがむ。

頬を、温かいものが流れしていく。

泣き始めた晴をリルヴァーナは優しく抱きしめて頭をなでてくれた。リルヴァーナのその手があるで、お母さんのように遠い遠い、昔の記憶が少し開いたのかもしない。悲しみだけではなく、既視感に後押しされて涙はどんどん流れていった。

泣き続ける晴にリルヴァーナは何も言わずにずっと頭をなで続けてくれる。

どれくらい泣いていたのかわからない。これから自分がどうなつてしまつのか、どうやって生きていけばいいのか

全くわからないまま、晴はリルヴァーナの腕の中で泣きつかれて眠ってしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5255z/>

---

世界に嫌われた女の子

2011年12月17日21時49分発行